

特 240

538

日露戦争の思出



(昭和六年二月
印刷代書)

陸軍省

343

135



始



#240
538

明治天皇御製

よもの海みなはらからと思ふ世に

など波風のたちさわぐらむ



滿洲軍總司令部の奉天入城

(鹿子木孟郎氏作)

明治三十八年三月十日、奉天の大
會戦は敵兵の大敗によりて大團圓
を告げ、同十五日大山滿洲軍總司
令官は兒玉總參謀長以下幕僚を従
へ、午後三時三十分奉天城に到着
せられた。
此の圖は、大山元帥以下が、奉天
南大門より入城せらるゝ光景であ
る。

目次

第一、露國の野心 一

第二、舉國一致 七

第三、開戦 一〇

第四、宸慮 一三

第五、旅順攻城 一六

第六、遼陽會戦 二〇

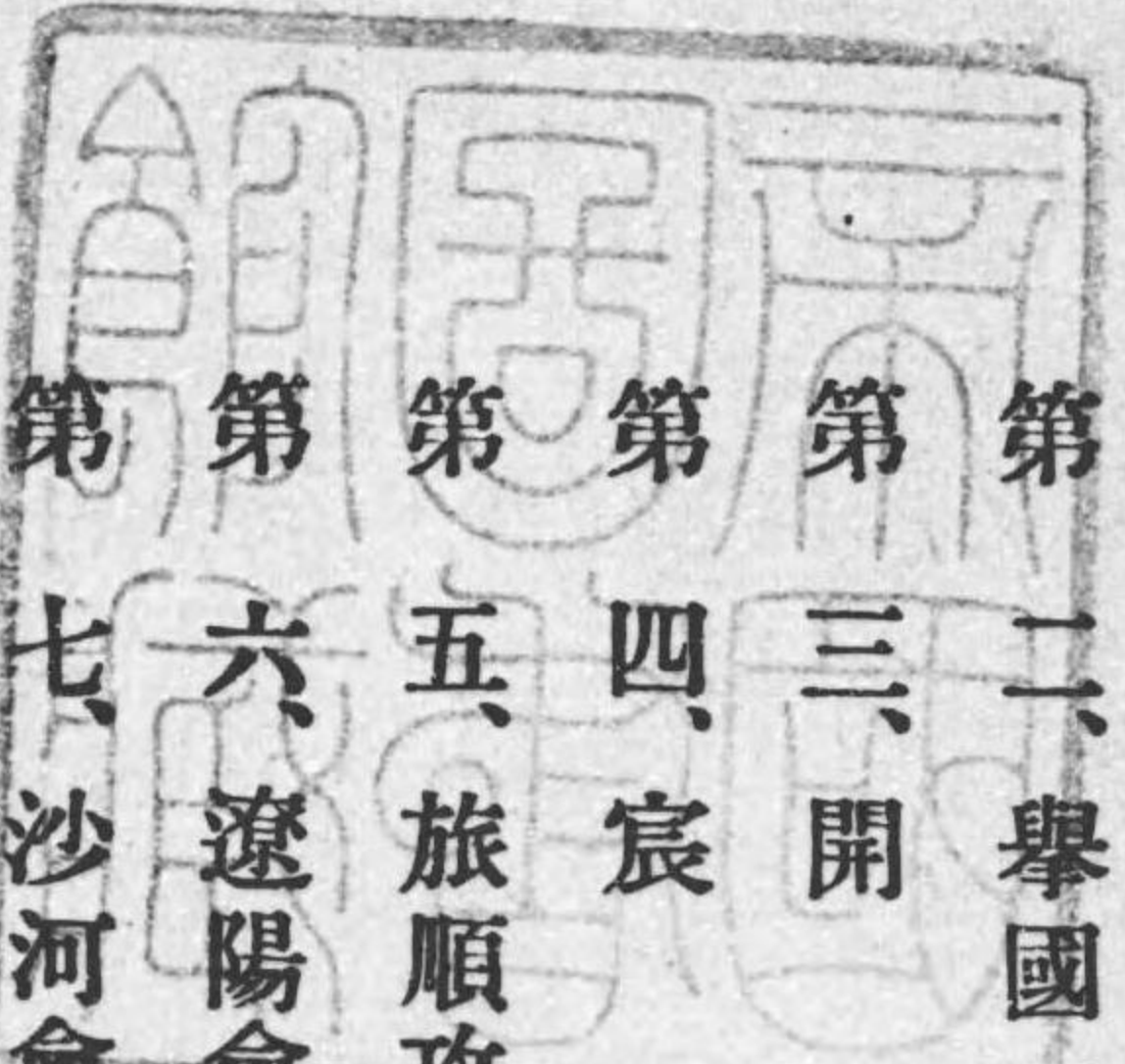
第七、沙河會戦 二五

第八、奉天會戦 三二

第九、勇士の最期 三五

目次

一



亨白一郎氏寄贈本

第十、家郷の便り……………三

第十一、異郷に咲く花……………四

第十二、講和……………五

日露戦争の思出

本書は、日露戦争當時及その前後に於けるおもに代表的の
 言論の一端、文書の一節、詩、歌等を輯録したものである。

第一、露國の野心

一、晴天の霹靂！三國干涉……………臥薪嘗膽

明治二十八年四月二十三日、駐日露國公使ヒトロヅォー氏は、獨、佛兩國公使
 と帯同して突如わが外務省に出頭し、次官林董氏（陸奥大臣不在）に面會を求め、
 左の驚くべき要求をわが政府に提出し、日清戦争の勝利に酔へる、わが國民の膽
 を奪つたのみならず、遂にはわが數萬の貴き犠牲を以つて漸く獲得した遼東半島
 を、僅かに一片の覺書を以て奪ふに至つた。

露國皇帝陛下の政府は、日本より清國に向つて要求したる講和條件を査閲するに、

遼東半島を日本にて所有するは、昔に清國首府を危くするの恐あるのみならず、之と同時に朝鮮國の獨立を有名無實と爲すものにして、右は將來極東永久の平和に對し、障害を興ふるものと認む。

因つて露國政府は、日本國皇帝陛下の政府に向つて、重ねて其の誠實なる友誼を表せむが爲、茲に日本國政府に勸告するに、遼東半島を領有することを斷然放棄すべきことを以てす。

翌四月二十四日、廣島に於ては長くも急遽御前會議が開かれ、更らに審議に審議を重ねた末、陸奥外務大臣は、駐露公使西德二郎氏をして交渉せしめたが、露國は既に戰意を決しありて到底緩和の餘地なきを知り、熟慮の後五月四日、已むなく左の回答を三國に送つた。

日本政府は、露、獨、佛三國の友誼ある忠告に基き、遼東半島の永久所領を放棄することを約す。

二、學堂尾崎行雄氏の慷慨

明治二十九年一月九日、第九回帝國議會に於ける演說の一節

國を建つること二千有餘年、未だ一度も他國の威武に屈して、寸地尺壤と雖も之を讓つた事は無い、然るに明治の昭代、立憲政體の今日に方り、而も古今無雙の聖君子を戴いて居る所の今日の場合に於て、初めて皇祖皇宗曾て爲した事の無い、強國の威武に屈して、我が土地を他國に讓るといふが如き事柄を初めて今日爲し……云々

三、ロシアの遼東半島占領密議

明治三十年十月上旬、ロシア宮庭内に於ける御前會議(ウイッテ伯回想記抜萃)

外務大臣ムラヴィヨフ伯曰く、

「ドイツの膠州灣の占領……もつと正しくいへば、ドイツのこの強奪政策を利用してロシアは極東における太平洋沿岸に港灣を獲得することが必要である。それには戰略上

重要な位置を占めてゐる。港灣則ち旅順、大連をも占領すべきである。

四

今こそこれを敢行するに絶好の機會である。」

大蔵大臣ウイッテ氏曰く、

「曾て我々はかういふ占領に對し極力支那の領土保全を主張した。そしてこの主張に依り日本をして遼東半島を放棄せしめた。しかも大連と旅順とはその遼東半島の中に包含されてゐるのである。また我々はその後日本に對抗して支那と秘密防禦同盟を締結してゐる。その際我々は支那の領土を占領しようとする日本の一切の方針に對し支那を防護すべき義務を負ふたのである。」

さういふ約束をしておきながら自からこれに類した占領をすることは非常に不穩な且惡辣な手段である。そのみでなく、もしこんな惡辣な方法をとつて日本にも支那にも疑惑の念を起させた場合、この方法は大きな危險に遭遇しなければならぬ。なぜならば、我々は現に蒙古と支那の領土とを經て東支鐵道を建設し始めたばかりであ

る。そして幸に我々はいま彼地に優越な立場を占めてゐる、ところが旅順、大連を占領すれば現在我々に對し極めて從順親密な關係をもつ支那をして非常な反感を起させるに違ひないからである。その上に、大連、旅順を占領した場合、我々はこの兩地點の占領を確實に保障するため、この地方と東支鐵道とを連接する必要が起ることは極めて明らかなことである。

さすれば我々はその支線の建設を餘儀なくされる。そしてその支線は、支那人の人口稠密な滿洲をよこぎり清朝發祥の地である奉天を經て建設しなければならぬ。

すべてこれ等のことは我々をもつとも不幸な結果に導びくばかりである。」

陸軍大臣ワンノフスキー氏曰く、

「もし外務大臣がこの手段をとることが危險でないと考へるなら、陸軍大臣としては旅順、大連の占領は極めて必要なことである。」

海軍大臣トウイェルトフ氏曰く、

「海軍のためには太平洋にもつと近い朝鮮の沿岸にロシアの港灣をもつことが便利である。」

旅順、大連はその意味で海軍大臣を満足させる地點とは言ひ難い。」
大藏大臣ウイッテ氏曰く、

「この企圖に對しては日本もイギリスも決して平然とこれを見のがしはしまい。」
外務大臣ムラヴィヨフ伯曰く、

「それには自分が全責任を負ふ。日本やイギリスはこの問題に關する限り、何等の報復手段に出ないことを自分は確信する。」

かくして李鴻章には五十萬留、張蔭桓には二十五萬留といふ莫大な贈物が約束せられ、明治三十一年三月十五日に至りロシア全權と李鴻章及び張蔭桓との間に、支那は二十五ヶ年の租借期限で旅順、大連を含む關東州をロシアに讓渡し、租借權に對する報償は提起しないといふ條件の密約は調印された。

第二、學國一致

一、國民同盟會の奮起

貴族院議長であり東亞同文會長であつた近衛篤磨公は、頭山滿、佐々友房、長谷場純孝、柴四郎、根津一、鳥尾小彌太、中島錫胤、神鞭知常等の諸氏と謀つて奮起し、政府を鞭撻して急速に朝鮮に出兵せしめ、之に依つて滿洲に於ける露國の侵略的野心を牽制せんとし、明治三十三年七月四日、星ヶ岡茶寮で第一回の顔合せをなし、九月四日、上野精養軒で發會式を舉げて、種々猛運動を試み、國論を沸騰の極點に導いた。

十二月二十日、新富座で開かれた中央大會の如きは、來會者五千名に及ぶの盛況を呈し翌三十四年に至り、露清密約の噂が高かつたので、一月十五日、更に大會を開き左の決議を要路に致し、警告した。

政府は、宜しく滿洲に於ける露國の占領を開放せしめ、露清密約に反對する方法を執るべし。

八

二、七博士の絶叫と對露同志會の活躍

主戦論の急先鋒たる帝大教授、戸水寛人、寺尾亨、富井政章、小野塚喜平次、金井延、高橋作衛、中村進午等の諸博士は明治三十六年夏頃より交々街頭に躍り出で、専ら左の趣旨を絶叫し大いに國論を喚起した。

開戦一日も忽にすべからず、速かに露國の不信と横暴とを膺懲すべし。

對露同志會亦、之に策應し、歩調を揃へて露國の暴狀を痛論し、世人の耳目を聳動せしめた。

三、衆議院議長河野廣中氏の公憤

明治三十六年十二月十日、第十九回帝國議會開院式に於ける奉答文の一節

今や國運ノ興隆洵ニ千載ノ一遇ナルニ方テ閣臣ノ施設之ニ伴ハス内政ハ彌縫ヲ事トシ外交ハ機宜ヲ失シ巨等ヲシテ憂虞措ク能ハサラシム仰キ願クハ聖鑑ヲ垂レ賜ハムコトヲ。

四、大隈憲政本黨總理演說の一節

明治三十七年四月二十三日、憲政本黨代議士評議員聯合協議會に於て

(前略) 國民の狀態如何といふに勃興せる愛國心は、その財産を犠牲として國家に貢獻するを期し、恤兵、献金、後援會其他の事業起り、議會亦巨額の軍事費を可決し、軍人をして後顧の憂なからしめたのである。

(中略) 戦争は獨り悲觀的に觀るべきでない、國家の成長に於ては、一世紀若くは半世紀を早からしむるものがある、彼の佛國のナポレオン戦争、普佛戦争、米國の南北戦争、英國の奈翁戦争の如きその勝敗の如何に拘らず、國家の成長を速かならしめた

九

もので、日本の西南戦争、日清戦争亦何れもそうでないものはないのである、故に余は今日に於て成るべく戦争より来る苦痛を少からしめ、成るべく戦争を利用して國民の發展に勧めしめんことを希望する。(後略)

第三、開 戦

一、極東總督アレキセーフ氏の意見具申

明治三十七年二月、十六回に亘る平和的交渉の後、わが國が最後の提案をなした際の電奏文

日本は、國狭く兵少く財も亦乏しい、その常に虚勢を張るのは英國の煽動に依るのみである、而も英國は萬一の場合に日本を助けて立つ程の決心がなく、縦ひその決心があつても實行至難である。日本はこの事情を知るが故に、斷じて最後の手段に訴ふ

ることはないであらう、露國にして、飽くまで強硬の態度を執るに於ては、日本は必ずわが主張に屈從するに至るであらう。

二、伊藤公の決意

明治三十七年二月四日、日露開戦廟議決定の日、金子子爵に語られた談話の一節、今度の戦は實に陸海軍でもわが輩でも成功の見込はついてゐない。併し日露の形勢眞にやむことを得ず、わが國は國運を賭して戦を始めた譯であの強大なる露西亞の大軍が朝鮮に侵入すれば、聽て朝鮮は掠奪されてしまふであらう。それで陸軍では、朝鮮でこれを防ぎ止める戦略であるけれども、之とて成功の見込十分とは申されぬ。

わが海軍とても、敵海軍と雌雄を決して、或は皆沈没するかも知れぬ。誰もが勝算確かなりと云ふことは出来ない。そこで萬一にもわが軍が朝鮮で破れ露軍が侵入して来たときは、及ばすながらこの博文も、昔の北條時宗の故事に倣うて自ら武器を取り

身を卒伍の中に投じ、自分の家内も時宗の妻女に見習はして兵食の炊爨にあたらせ、夫婦共々に九州なり山陰道なりに出かけ残つた國民と共に海岸を守り、一步たりとも露兵を日本の土地に上らせない決心である。

三、兒玉參謀次長曰く

金子遣米使節出發前訪問の際

まあ今の所は彼我五分々々だから、私は之を四分六分にしよう、今日迄三十日餘り參謀本部で軍服の儘赤毛布をかむつて起居して苦心して居る。

君は渡米後、五度は勝報、五度は敗報を受け取る覺悟で居て呉れ、若し折角苦心した通りに甘く行けば、勝敗の電報は六と四との割合にならう。云々、

四、山本海軍大臣曰く

(同 右)

先づ日本の軍艦は半分沈没させる覺悟だ、それでも、勝利を得ねばならんと良策を案じて居る處だ。云々

五、寺内陸軍大臣と藤井第一軍參謀長との對話

明治三十七年二月第一軍司令部出征前

藤井第一軍參謀長曰く、

「第一軍が韓國に作戰するに就ては、將來鴨綠江を渡河する場合を顧慮し、渡河材料を携行致し度きに付御配慮相煩し度。」

寺内陸軍大臣曰く、

「鴨綠江の線までを占領するが大問題である、今から鴨綠江の渡河の如きを彼れ此れ云ふことが出来るものか。」

六、露國ウオーガツク將軍の揚言

開戦前北京政治團に對し

日本は露西亞に對しては、車輪に止まる蠅のようなもので、露西亞が日本を撃破することは紙を裂くよりも易い、眞に鎧袖一觸にも價しない。

七、駐米露國大使カシニエー氏の豪語

明治三十七年四月、開戦後米國親日富豪ウォルター氏に對し

露軍は恰も猛獸の如く向ふ所敵がない、日本軍は必ずや遠からず全滅するであらう。

八、獨逸政治家の意向

明治三十七年二月十三日、伯林來電

日露戰爭に關する獨逸政府の位置は、その行爲に於ては中立なるも、その意向は露國の優勢を欲するのである。

今回の戰爭は滿洲若くは韓國に向つての争闘にあらずして、實は文明及人種の争闘

である、若し白、黃兩人種の一を選べといはゞ獨逸は勢ひ白人に同情せざるを得ない。

然しながら獨逸政府は露國の行爲を以て賢なるものとはなさず、日本が遼東、遼南の雪辱をなすべき開戦の理由は充分にあるものと信じて居る。云々

九、駐西米國公使フツド、ポート氏演説の一節

明治三十七年四月、歸米中朝野名士列席の晚餐會席上

日本は米國とは、今日迄何等深い關係はない、従つて恩義の上から言へば我々は露國を援助するのが當然である。併し今度の戰爭たるや、日本は正義人道の爲國運を賭して懸つて居る、之に反し露國の方は唯領土擴張慾の爲の戰爭であつて東洋文明を破壊せんとする惡むべき侵略者である。

果して然らば、米國民として、恩は恩として忘れてはならぬが、正義人道は吾人の生命であつて、義を助けるのが人間の道である、宜しく日本を援助せねばならぬ。云々

十、米國人イムブリー博士演説の一節

一六

明治三十七年五月十六日、開戦後大日本宗敎家大會に於て

思ふに今回の戦争の目的は、一は日本帝國の安全の爲であつて、一は東洋永久の平和の爲である。予は過日桂伯と面會の榮を得た時、伯は總理大臣として、戦争が全く帝國の安全と東洋の平和の爲であることを斷言せられた。

十一、黒木第一軍司令官の第一訓示

明治三十七年三月、廣島に於て進發に先ち下されたるもの

(前略) 今や諸子は爲楨と共に帝國陸軍の先頭たり、夫先頭の任たる^{きは}碁めて重く全軍の志氣實に之れに繋る、曰く剛毅、曰く果敢、曰く沈着、曰く忍耐、凡そ平素涵養蘊蓄せし所を發揮して勇往直前するを期せざるべからず。

(中略) 夫れ大和民族の兵進んでスラヴ種族と戦ふ、これ空前の壯舉にして曠古の盛

事なり、世界各國皆耳を^{そはだ}敬て、視聽す、一舉一動苟くもすべからず。(後略)

十二、露國大藏大臣ウイツテ氏曰く

「日本は多年汲々として開戦の準備をととのへてゐたのである。だから、我々の態度の如何にかゝはらず、彼れは何らかの口實のもとに必らずロシアに挑戦したのであらう」とは、我々のよく聞く所であるが、これは決して當をえたものではない。もし我々が支那との協約を忠實に遵守し、朝鮮に對して、十九世紀の世界に不似合な冒險を行はなかつたならば、また我々が伊藤侯の誠意ある提議を傾聽し、なほ栗野日本公使が開戦の間際に提議した協定案に同意する雅量があつたならば、日露兩國の間に戦火をまじへることは避けえたであらう。(ウイツテ伯回想記抜萃)

十三、クロパトキン將軍の作戰方針

明治三十七年二月八日、出征軍司令官に任命せられ、出發するに當り、その前

夜ウイッテ氏に提示し、その同意を得たもの（ウイッテ伯回想記抜萃）

我々はこの戦争には何らの準備もしてゐなかつた。したがつて充分に準備をした敵と對抗するに足る兵力を集めるには今後數ヶ月を要するのは事實である。私の計畫としては、まづ我が兵力を必要の程度まで増加することに努力する。その成るまではハルピンを目標として後退するが、日本軍の前進を手間取らせるために途々數回の交戦をするのは勿論である。旅順はしばらく独自の防禦にまかす。それでも旅順は今後數ヶ月を維持し得ることを確信する。歐露その他から輸送して來る兵はハルピンに近い一定の地に集結してこれを訓練する。さうして後退軍がその地點に達したとき、兩者をして大軍を編成し、同時に攻勢に移つて日本軍を粉碎するの作戦に出る他はないと思ふ。

この方針は極東總督アレクセエフ氏の旅順救援策と衝突し、兩者の軋轢日に滋く統帥權の獨立は全く犯され露軍敗戦の一大原因を醸すに至つた。

第四、宸 慮

一、明治天皇御製

- 一、 戦のにはのおとづれいかにぞと
ねやにも入らずまちにこそまで
- 二、 夢さめてまづこそ思へ軍人
むかひしかたのたよりいかにと
- 三、 こらは皆軍のにはにいではてゝ
翁やひとり山田もるらむ
- 四、 戦のにはに立つ身をいかにぞと
思へば花もみるこゝちせず
- 五、 いくさ人いかなるのべにあかすらむ

蚊の聲しげくなれる夜ごろを

六、たへがたき暑さにつけていたておふ

人のうへこそ思ひやられるれ

七、戦のにはの寒さをおもふにも

まづ待たるゝは春にぞありける

二、昭憲皇太后御沙汰

明治三十七年二月十四日、金子子爵の葉山別邸へ急に 行啓遊ばされた際

今朝は早くより金子の家を騒がせ、誠に氣の毒に存ず、聞く所に依れば金子は近日米國に渡航する由、その御用の趣は知らざれども、大體は推察をすることが出来る。今度日露戦争が始まるにつき、米國に渡航するは必ず重大なる任務を帯びてのこと、思ふ、就ては御國の爲十分盡力するやう特に依頼する。實はこの事を親しく依頼せんが爲め、今朝早くより來た譯である。

尙ほ長途の航海及在米中は、折角身體を大切にして任務を盡されたい。

三、下田歌子女史謹話

日露戦争當時、嚴寒の折柄遂に御風氣に罹らせ給ふて、一寸御熱度の下り兼ねた事がありました。それは全く酷寒の最中朝から晩まで或時は夜までも表に出御になつて、軍事を聞き召され政務を擧はせられましたその間、僅に御手焙り御一つであらせられた爲であります。

寒さは段々と増さりつゝ行く頃、もう暖爐を焚かしたい由を申し上げるとまだ可いゝとて御許しがなかつたので餘りに寒き朝、つい伺はないで暖爐の火を附けさせた、所が、

陛下には之を取除かせ給ふて、

「朕は斯く東京の宮城に居るとは言へ心は常に將卒と共に陣中にあるの覺悟で居る、今や彼等が氷雪の中に起臥して居る事を察してやらねばならぬ、さればせめては、火

氣をだに少くして彼等の勞苦を思ひやるの手段とする積りであるから、折角の好意であるが取り止めて貰ひたい。」

と仰せられたので、已むを得ず、恟々としてその儘に經過した間に、遂に御風氣を拜するに至つたのでありました。云々

第五、旅順攻城

天險に加ふるに人工を以てし難攻不落を誇る旅順要塞に對しては、第三軍（司令官乃木大將、第一、第九、第十一師團及攻城特種部隊、十一月第七師團増加）攻城に任じ、明治三十七年七月三十日攻圍陣地占領、第一回總攻撃（八月十九日より二十四日に亘りわが戰團總員約五萬一千、死傷約一萬六千）、第二回總攻撃（十月二十六日より三十一日に亘り戰團總員約四萬四千、死傷約四千）、第三回總攻撃（十一月二十六日より十二月六日に亘り戰團總員約六萬四千、死傷約一萬七

千）の後明治三十八年一月一日開城、攻城日子百五十五日、わが參加人員約十三萬（後方部隊を含む）、火砲三百九十三門、死傷實に五萬九千餘。敵の戰團總員約三萬四千、開城の際の捕虜約二萬五千、鹵獲火砲約一千二百門、小銃約六萬一千挺。

一、乃木大將夫人秘話

實に忘れも致しません、明治三十七年十一月十七日の朝、妾は家人に先ちて起床し二階の雨戸を開きましたたが偶々一人の男子が、妾を仰視し高聲を以て痛罵して申しますには「乃木のノロマめー、何を間違着いて居るか、内地で兵隊を作つて送れば片つ端から殺してしまふ。然るに自分では武士であるとか、侍だとか傲語する癖に、今尙ほ生存して居るではないか、若し眞の武士であるなら我々に申譯の爲潔よく切腹するが好い、若し又腹を切るのが痛ければ、せめて辭職でもするのが當然である。一體家族共も、何を愚圖々々して居るのかい、少しは考へて見るがよい。」餘りの暴言にて、聽く他人の手前も耻かしく、乃木家の武運も最早之までであると思つたから、急に階

下に降り、自室に蟄居して、女中には病氣と稱して、終日飲食せず、日の暮るゝを待った。午後六時頃、約二十年間使用した舊女中で近所に嫁いで居る者があつたから之を招き、態と臺所用の粗服に變じ、彼女を伴うて三等切符を求め新橋驛から乗車して、翌未明伊勢山田に着き、人目を避くる爲特に旅館に入らずして直ちに内宮に駈けつけ、手洗水を頭から浴して身を清め、その儘神前に跪き一心に神威を以て何卒旅順を陥落せしめ下さる様祈願しました。

二、東郷聯合艦隊司令官報告の一節

明治三十七年二月二十八日大本營著

過般、旅順閉塞の目的を以て、艦隊中より決死者を募集せしに、即時に二千名に近き勇士を得たり。

中に血書して願ひ出でし者もあり、其の敵愾心の大にして、士氣の旺盛なる、此の一

事を以ても明かなりと信ず。云々

三、陣中天長節の御馳走

旅順攻圍軍某隊は、天長節の御馳走として、支那人の大甕を以て、山麓に風呂場を造り半年振りで入浴させた。

入浴規定に曰く、

- 一、何人たりとも風呂場にて、虱を拂ふべからず。
- 二、水は、露兵の飯盒にて二杯より多く使用すべからず。
- 三、一人にて十分以上入浴すべからず。

四、二百三高地

伊藤公爵

久聞二百三高地 一萬八千埋骨山

今日登臨無限感 空看嶺上白雲還

乃木將軍

爾靈山嶮豈難攀 男子功名期克難

鐵血覆山山形改 萬人齊仰爾靈山

五、乃木大將とステツセル中將との會見

一月五日午前十一時三十五分開始於水師營

乃木大將、莊重なる態度で、

「わが 天皇陛下は、閣下が、祖國の爲めに盡された忠勤を嘉賞し賜ひ、武士の體面を保持せしむるよう予に勅命あらせられた。」
ステツセル中將、

「貴國の 皇帝陛下から、かくの如き優遇を蒙る事は、予に取りては無上の名譽である。
願はくば、閣下より予の衷心よりする深厚なる謝意を電奏せられたい。

(中 略)

聞く所に依れば、閣下は當方面の戰場に於て最愛の二子を喪はれたとの事である。
眞に御同情に堪えぬ。」

乃木大將、平然として微笑を湛へつゝ、

「予は二子が武門に生れ、軍人として共にその死所を得た事を悦ぶ、即ち長子は南山に斃れ、次子は二〇三高地に於て戦死した。かくの如く彼等兩人は、共に國家の犠牲となつたから獨り予が満足する許りでなく、彼等自身も多分満足して瞑目して居るであらう。」

ステツセル中將、愕然として、

「閣下は人世の最大幸福を犠牲にして毫も愁嘆の色なく、却つて二子が死所を得られたことを満足せらる、真に天下の偉人である、予等の遠く及ぶ所でない。」

第六、遼陽會戰

遼陽は開戦後に於けるわが作戰目標、われは遼陽へ、遼陽へと目ざし、かれは遼陽に於て、遼陽に於てと意氣込み一大決戦を豫想せられし大會戰、右より第一、第四、第二軍と列んで、八月二十八日攻撃開始、九月四日遼陽占領、わが戦闘總員約十三萬五千、死傷約二萬四千、敵の戦闘總員約二十二萬五千、死傷約二萬、彼我兵力の比は丁度、十對六、僅かに六割の兵力を以てしては果敢なる追撃をなして敵を潰滅するの餘力を缺き、爲めに平和の曙光を認むるに至らず、遂に沙河の對陣を餘儀無くせられた。

一、或る後備聯隊の命令の要旨

遼陽戰中頃に於ける

第一代の聯隊長は戦死し、第二代の聯隊長は負傷し、第三代の聯隊長亦戦死せり。聯隊は三聯隊長の爲に弔ひ合戦を決行せんとす。仍て聯隊は何時何分、某地附近にある軍旗の下に集合すべし。

二、橘中佐の戦死

明治三十七年九月十四日大阪朝日新聞記事

(前略)殊に南山、得利寺の役に苦戦したる某聯隊は、拂曉「シヤオヤンズイ」前面の山に進撃し一旦之を奪取したるも、三面より飛來する敵の銃砲火に包圍せられ、その危険一方ならざれば止むを得ず退却するに至れり。

關谷聯隊長先づ戦死し、橘第一大隊長は、自ら三人の敵を斬殺し、爲に七箇所の傷を負うて、仆るゝに至れり、鈴木第三大隊長亦三發の銃丸を被りて即死し、聯隊中満足に生存せる將校は少數となれり。

三、米國駐在佛國大使ゼスラン氏談話の一節

明治三十七年九月、遼陽會戰後

露國の武勇と忍耐とを表彰して餘あるものは遼陽の戦である。奉天附近に集めた軍隊こそ、露軍中最も精銳なるもののみであつて、この一團が居る以上、次の戦こそ、日本軍潰滅の時である。

第七、沙河會戰

敵軍攻勢移轉の兆歴然たるものあるを知り、敵に先ちわれより進んで攻勢に轉じ滿洲の曠野三十數里の戦線に展開されたる、有史以來、稀なる一大遭遇戦、十月十日全軍攻撃開始、十月十七日沙河の線に進出せしも、わが彈藥の缺乏は遂に果敢なる追撃を缺き沙河を距て、近く敵と相對し、戦闘交綏、わが戦闘總員、約十二萬一千、死傷約二萬、鹵獲砲四十五門、小銃約六千、俘虜約六百五十、敵の戦

闘總員約二十二萬二千、死傷約四萬一千。

一、兒玉滿洲軍總參謀長電報

明治三十七年十月十九日沙河會戰直後

退却せし敵は、尙渾河左岸に停止し、壞亂せし隊伍の整頓を終り、再び攻勢に轉ずるの企圖を有するもの、如し、我が兵力、士氣共に目下優勢の地位に在るを以て、此の時機に於て、今一度敵に打撃を與ふるは最も有利とす。然れども如何せん砲彈缺乏の爲之を實行する能はず、現に全線共に三、四百米より二、三千米の間に接觸し、日夜銃砲火を交へ、毎夜互に夜襲を反覆しあるに拘らず、更に斷乎たる打撃を加ふる能はずして沙河の線に堅固に陣地を構成し、唯彈藥の補充を待たざるべからざるは實に遺憾に堪えず。

二、山縣參謀總長の返信

砲彈の一事、種々方法を講じ、製造力を増し又外國に注文する等、實に全力を注ぎつゝあるも、只今豊かなる補給を爲す能はざるは千歳の恨事なり。過日總理官邸に於て軍の爲にする補給品調辨には金錢を惜むべからざるを主張し、閣員之に反對する者無かりしも、如何せん比年消極計畫の結果今日俄に擴張し能はず、動もすれば戦機を失せんとするの恐あるは返す返すも遺憾なり。

第八、奉天會戰

日露戦争事實上の決戦、明治三十八年三月一日を期しわが總攻撃開始、右より、鴨綠江軍、第一、第四、第二、第三軍の順序に四十里に亘り展開、到る處頑強なる敵の抵抗を受け惡戦苦闘を重ねしも第三軍の敵の右翼に對する包圍運動は、逐次進展、七日頃より敵退却の兆あり、三月十日奉天を全く包圍し敵は僅かに奉天―鐵嶺道に血路を求めて退却、わが戦團總員約二十五萬、死傷約七萬、鹵獲の主

なるもの軍旗三旒、砲四十八門、小銃約三萬四千、俘虜は約二萬二千、敵の戦團總員約三十二萬、死傷失踪約九萬、敵を殲滅し得べくして殲滅するに至らざりしは、一にわが兵力の寡少なりしに因る、誠に千載の恨事。

一、兒玉總參謀長の祈願

奉天會戰前、毎朝早く人知れず太陽を拜するを發見められた際

あゝ見つかつたかな、實はこの戦争がどうなるか勝敗が氣にかゝつて夜も眠られぬ、それに露軍はその數も増すのみで戦争が長引けば長引くほどわが軍の勝利は覺束なくなる、わが國のなし得べきことは萬事なしつくしてある、これより以上はわれわれの力にあまる、けれども自分は人間以上の力といふものを今まで知らない、何かあるまいかと色々求めたが、まづ自分の目に映るものは太陽以上のものはないやうであるから、毎朝ここに來て、戦勝を祈つてゐる次第である。

二、山縣元帥の詩

對峙兩軍今若何 戰聲恰似迅雷過

奉天城外三更雪 百萬精兵渡大河

三、露軍從軍通信記者、英人「マクカラア」氏曰く

時は午前一時、……俄に激烈な小銃射撃の音が聞えた、十日間この方、われ等は、日となく夜となく小銃の音に聞き飽きて居た。けれども今聞くやうな不吉の前兆らしい、しかもかくの如くに、威嚇的な銃聲は、いまだ曾つて聞かなかつたのである、續いて一發の大砲聲が轟き渡つた、あだかも滿洲に於ける、露西亞帝國の失權を弔ふ葬禮の梵鐘のように、……この大砲聲が轟き渡つた時日本の諸軍は猛烈な攻撃を續行してゐた、奉天は今や日本天皇の軍隊によつて、全く包圍せられた、かくして、滿洲

の封建的覇權は、永久に露西亞の手裡から脱れた。

四、デーリー、テレグラフ曰く

奉天會戦後に於て

ツアールが「太平洋を制せずんばわが劍また鞘に收むべからず」と宣したるは、つい數日前の事にてありながら、ツアールのこの劍はツアールの手より取り去られた。クロバトキンの大敗を見て未だ日本に和を乞はざるは、ツアールの眼病醫すべからざるの證にして後來一層苦しき打撃を受くるの前兆である。日本の勝利や天下無比、ツアールの愚も亦天下無比である。

第九、勇士の最期

一、大越中佐の述懐書

奉天會戰、于洪屯の激戦に於て、歩兵第六聯隊大隊長たる大越中佐(當時少佐)は、孤城落日、援軍至らざるの苦境を見るに忍びず、傷餘の身、自ら竹内聯隊長に請ふて傳令たらんとし、萬死に一生を賭して重圍を突いて出でたが、忽ち身に數彈を受けて立つ能はず、濱島一等卒に雙眼鏡と證明書とを與へ、圖囊内の圖書を處理し、述懷書を認め、拳銃を以つて眉間を撃つて自刃せられた。

述 懷 書 (通信紙に鉛筆にて記す)

發 三月七日午後六時三十分

於 李官堡南方無名部落西方畑地

大 越 少 佐

南 部 少 將 殿

一、聯隊長及び他ノ大隊長ト行動ヲ共ニセズ獨リ陣地ヲ退キタルハ、聯隊長ノ依託ヲ受ケ實況ヲ旅團長閣下ニ報セントセシニアリキ。

二、途中ノ危險ヲ顧慮セザルニアラザルハ勿論ナリシモ、聯隊長以下同僚及部下兵卒ノ苦境ニ陥リツ、アルヲ見ルニ忍ビズ、死ヲ決シテ旅團長ニ會シ實況ヲ報告シ之ヲ救フノ策ヲ講ジ、再ビ陣地ニ引返シ前諸官及部下兵卒ト枕ヲ並ベテ死セントセシニアリキ、然ルニ残念乍ラ途中ニ於テ負傷シ、此ノ目的ヲ達スル能ハザリシハ返ストクモ遺憾ノ極ミナリ、仍テ負傷後自ラ死シテ聯隊長及同僚並ビニ部下ト共ニ地下ニ會セントセリ。然ルニ右手負傷刀ヲ執ルニ堪エズ、仍テ拳銃ヲ以テ自刃ス閣下微衷ヲ察セヨ。

茲ニ多年來ノ御厚誼ヲ謝シテ衷情ヲ述ブルコト右ノ如シ。

終リニ閣下ノ御武運長久ヲ祈ル。

三、身體疲勞シ筆ヲ執ルニ困難ナリ、仍テ概況ヲ述ブ。

二、廣瀨中佐の戦死

明治三十七年三月三十日、東郷聯合艦隊司令長官報告

(前略) 戦死者中福井丸の廣瀬中佐及杉野兵曹長の最後は、頗る壯烈にして同船の投錨せんとするや、杉野兵曹長は、爆發薬に點火する爲め船艙に下りし時、敵の魚形水雷命中したるを以て遂に戦死せるもの、如く、廣瀬中佐は乗員を端舟に乗り移らしめ、杉野兵曹長の見當らざる爲め自ら三たび船内を搜索したるも、船體漸次に沈没、海水上甲板に達せるを以て、止むを得ず端舟に下り本船を離れ敵彈の下を退却せる際、一巨彈中佐の頭部を撃ち中佐の體は、一片の肉塊を艇内に残して海中に墜落したるものなり、中佐は平時に於ても常に軍人の龜鑑たるのみならず、其最後に於ても萬世不滅の好鑑を残せるものと謂ふべし。(後略)

三、堀内大尉袂別の遺書

堀内大尉、名は小内藏、福井縣の人、歩兵第三十六聯隊小隊長として出征、旅順の攻撃に任じ明治三十七年十二月二十八日戦死。

謹啓、御手紙難有拜見仕候、愈々御壯武御忠勤の段奉欣賀候、却説、小弟事、

明二十八日午前十時を期し二龍山輕砲臺の爆破と共に聯隊の選抜兵九十名を提げ砲臺に飛込可申候、成否、生死天に在り候、唯、陛下の特に賜ひたる詔勅に對し、國民半歳の熱望に對し、あらん限りの精神と體力とを竭して突入可仕候、斃るれば起ち、傷けば奮ひ、飽くまで目的を貫徹せんことを期し申候、あすは、二龍山頭白雪の上に、大和武士の花と散らんとす、人生觀じ來れば夢の如し。

死をちかふたけ夫のかばねこえ行かん

二龍のみぞはよしふかくとも

終に臨み、滿腔の誠意を以て御武運長久を奉祈候。

さらば!!!

十二月廿七日夜半

小内藏 拜

義助 兄

早川 兄

尙辱知諸賢によろしく

四、根占曹長の遺言

左記は、鹿兒島縣薩摩郡の人、歩兵第二十三聯隊歩兵曹長根占清一郎氏の遺言であるが、首山堡附近の戦闘に於て、突撃の際、中隊は敵壘二、三十米に接近し苦戦に陥り、將校は悉く戦死し、下士兵卒も亦四分の三強の死傷者を出すに至つたけれども、曹長は、殘餘の兵を纏め激戦奮闘、大に勉め遂に身に敵弾を受け、命將に絶えんとするに臨み、手牒に認め書き終らざるに遂に逝つたのである。

予は、彈丸三個を受け、此の地に戦死す、後事は特務曹長殿に御願申す、予の背部の負傷は退却の際受けし傷にあらず別に云ひ残す事なし。唯寸功なく此の地に於て戦死するを遺憾に思ふ。

國の爲め盡しし……………(絶命)

五、後藤伍長の遺詠

左記は、歩兵第六聯隊後藤信太郎氏の遺詠である。

一、今日こそはさて今日こそは大君に

捧げまつらめこの血この骨

二、君のため身は亡き數に入りてこそ

親に事ふる道もありけれ

六、喇叭手と軍醫との死の問答

左記は、近衛後備第二聯隊喇叭手松澤磯太郎氏が、敵弾の爲、左大腿及右肺上部を貫通せられ、死に類した時の問答である。

喇叭手、微かに眼を開いて、

「軍醫殿、私はとても、助かる傷てはありません、只今御手厚き御手當を煩してもどうせ手術台上で散る身です。それよりも此處に居る戦友二名は、私よりも輕傷ですから私を捨て、置いて早く之を御手當下され、速に全治の上再び戰場に出て花々しく働かして下さい。」

軍醫、暫し之を凝視したが決心の色頗る堅きものあるを以て双頬に傳ふる涙を拭ひ

つゝ、

「然らば、他の者より手當をするから氣をしつかりと持て、」

喇叭手、莞爾として、

「有難う御座います、いろく御世話になりましたが、之で御別れを致します。

中隊長殿始め一同によろしく、私は地下より皆様の戦功を祈ります。……」

血を吐きつゝ遂に瞑目、

七、志士横川省三氏遺言

横川氏は、某重大使命を帯びて沖積介氏等と共に明治三十七年二月以來、蒙古人に變装して敵の背後に活躍したが、四月中旬チチハル附近に於て捕へられ、四月二十一日、ハルビンに於て銃殺された。

左記はその二女に送つた遺書である。

父は、天皇陛下の命に依り敵國に進入せしが、不幸にも敵の捕ふる所となり明日死刑に處せらる。汝等は、將來健康にて國家の爲に盡せよ。金千圓を送る筈なりしも、之を露國赤十字社に寄附することとせり。云々

第十、家郷の便り

一、父の手紙

左記は、歩兵第四十五聯隊歩兵上等兵西森權太郎氏に宛てたる、その父の手紙の一節である。西森上等兵は出征以來、連戦拔群の功をたてしが、奉天

會戰後、人に語つて曰く「我れ未だ衆を抜くの功なく碌々今日に至る、親父に申譯なし、今後の戦闘に於ては必ず決死隊に入りて功を建て忠節を完うし、父の心を慰めん」と

汝、戦地に向ひしより茲に一年有餘の星霜を経たり、この間、汝が拔群の功あらんことを待ちつつあるも、結果は希望に反し未だ、何等の働きあるを聞かず、戒む、汝武士の本領を守り報國の大義を遂げ以て家名を完うせよ。

二、母の手紙

左記は、友井熊太郎氏の母より、小隊長に宛てた手紙であつて、熊太郎氏は、熊本縣飽託郡の出身にして歩兵第十三聯隊の一等卒である。

(前略) 悴事、生來の愚物にて何も出来ざるものに候へば、御馬先の御用に立ち居る事如何と心配致し候間、何卒、此の上ながら鞭撻指導せられ、國家の爲幾分なりとも御用立せ被下度、乍恐御願申上候、妾とても君國の爲捧げし事にて、名譽

の死傷は妾に於ても此の上なき御奉公と存居候、然るに第一未練なる事ども致す問敷きかと懸念致し、常に以紙面を勵まし居り候へ共、不肖なる者に候へば、尙一層御叱責の上、何卒御奉公致し候様、御引立被下度深く奉願候。

熊 太 郎 母

迫 小 隊 長 殿

三、兄の手紙

左記は、柴田松造氏の兄より中隊長に宛てた手紙であつて、松造氏は、兵庫縣多紀郡の出身、後備歩兵第二十聯隊の上等兵なるが、奇しくも此の手紙を出せる三月十日、奉天附近馬家橋に於て、奮戦遂に戦死したのである。

(前略) 此の頃の新聞にて見れば、日々激しき戦闘の最中にて戦死者も大分有之候由、定めし弟松造も國を出でし時の誓ひを守りなば迎も此頃は生き残り居る間

敷と存候、若しも此の手紙到着致候迄に、戦死致居候へば之こそ本人は更なり一家の名譽にして、又御國の爲少しの御恩報じも出来たる事と喜ぶべき次第に候、若しも未だ生存致し居候へば、充分御叱の上、水火の中をも勇まし働くべき様、御言ひ聞かせ被下度、先は御依頼申上候。

早々

三月十日

柴田松造兄

柴田與之助

中隊長殿

四、妻の手紙

左記は増井松太郎氏妻より中隊長に宛てた手紙であつて、松太郎氏は、歩兵第三十九聯隊の伍長で各地に轉戦殊勳を現はし、孤楡樹附近の戦闘に於て

は、左腕に貫通銃創を受け入院したるが、その傷痕未だ癒えざるに希望して退院し、四月二十二日、開原附近の戦闘に於て斥候長となり奮闘し遂に戦死したのである。

恐れながら、拙なき筆をも顧みず御禮申述へ候。初夏の候、何の御恙もなく被爲涉萬々御芽出度賀し上げ候。扱てとや、愚夫松太郎儀かね深く御目を掛けさせられ、誠に難有仕合せに存上げ候。就ては、同人、昨春出征の節の申遣には吾一命は國家に捧げ參らせられたれば、此世にては是今日を限りぞ、さればそちも軍人の妻たるに恥ぢぬ様、娘千代を我に代りて大切に養育せよ。其外には何事も申す事もなしと勇ましく出征致せる後には心盡しの甲斐もなく千代は昨夏病死致し候ひしも其由松太郎へ申送りなば力を落し勇氣をくじく事もや有らんかと秘して便りの度毎に無事生立と計り申送り居り私事も只一人になりし身のむさと日を送るも餘り冥加に過ぎたれば、表記の所へ奉公に住込み勤め居り候處、過日出征中

の友人より里方へ松太郎行方不明の由手紙参りたれば事の實否を確めんと、一昨日歸村致し候處へ、隊長様の御芳墨に預り數ならぬ一兵卒に、斯くも厚き御情けを掛けさせ給ふ事の勿體なく、身に餘る面目と嬉し涙にむせび入り候。戦死は豫て覺悟の上なれば聊かもなげく事は候はねども勇ましき最後を成し呉れしや、若し萬一見苦しき姿を見せ敵にア、見よ日本の兵士はと笑を受けて一人の爲に皆様方の御顔を穢し候様の事なかりしやと是のみが心掛りに存せられ候。追々暑さの候に向ひ候へば、隊長様を始め皆様御一同様、益々御健康に被爲涉御武運いや榮にましませと切に祈上候。

先は廻らぬ筆の後や先き、御禮まで御判讀願上候。芽出度かしく。

明治三十八年五月二十四日

松太郎妻 増 井 ひ で

五、妻の歌

左記は、明治三十八年一月、新年歌御會始入選歌であつて山梨縣陸軍歩兵二等卒妻大須賀松枝の詠である。

新年山

つはものに召出されしわが背子は

いづこの山に年迎ふらん

第十一、異郷に咲く花

一、石黒子爵談

軍艦矢矧が航行中、ひどい流行性感胃がはやつて、全員殆ど枕も上らぬ大病、艦の運轉さへ困難で辛ふじてマニラに入港した時分には、もうどうすることも出来なかつ

た。そこへしとやかな婦人がひよこりと艦を訪ねて、「私は、赤十字社で看護婦をしてゐたものですが、この艦が病人のために困つて居るといふ事を伺つて参りました、及ばすながら私に看護させて下さい。」といふ。だんくきいて見ると、この婦人には四人の子があるが、その子はわざ／＼他人に預けて夫の許可を得て来たとのことだ。

艦長にして見ると救ひの神だが、「そうですか」といふわけにも行かないで、いろいろ領事にきいて見ると身もともしつかりしてゐる。この看護人を迎へて兵員も、漸く安心し自然病氣もよくなり相當日も経つたが、婦人は、「私は赤十字社の看護婦養成所を卒業しながら、夫と共にマニラに来てゐたために日露戦争にも御奉公出来ませんでした、それに大分よろしいと申しても、まだ／＼看護を必要とする患者が大せいある事です、もう少し艦内に留めておいて下さい。」といつて承知せず、全員がベットを離れるまでひねもすよもすがら看護を盡した。この婦人の名は、天野けさといひ山梨縣の出身で、日露役の最中に、「私は赤十字社で御世話になつた看護婦ですが、夫と共にマ

ニラに来てゐるために今回の召集にも加はれず残念です。私の同期生はみんな出征して苦勞してゐるのに、私だけがかうしてゐるのは忍べません。それでここに私が一圓二圓の小遣の中からたくはへたお金が百圓あります。私の心をお汲み取り下さつてこれを出征してゐる同期の方々へ差上げて下さい。」といふ、手紙と、百圓爲替とを私の許に送つて寄越し、尙その後も「同期生と一緒に日露役に行かなかつたことが残念でなりません、そこで今回歸國するについて長い旅行だし子供もつれてゐるのだからと、夫から汽船も、汽車も一等で行けとその旅費をくれましたが、私はも／＼農家の生れだからだが丈夫ですから三等で参りましたので、こゝに百五十圓程お金が餘りました。これを赤十字社の基金に寄せたいと思ひますからよろしくお頼みします。」といふのである。

重ね／＼感心すべき婦人であるから調べて見ると、僅か高等小學を出たばかりで別に變つた家柄でもないが、その家庭は如何にも和氣藹々として笑聲の絶えないやうな

うらやましい家であるといふことである。

二、米國富豪ウォルター氏令嬢の金子子爵に對する嘆願

私に一つの御願ひがあります。夫れは此の戦争で日本軍の最も善い良策は、バイカル邊の鐵道を破壊することです。私はカフエーの女給に變装して露都から西伯利鐵道に乗り込み鐵道を破壊して日本軍の利益を圖りたいと思ひます。どうか此の事を皇后陛下に申上げて御許しになる様御願ひ致します。不幸にして露國官憲に捕へられ國際上の犯罪人として銃殺されても決して構ひません。

第十二、講 和

一、乃木大將の詩

休戦後法庫門に於て、

皇師百萬征強虜、野戰攻城屍作山、
愧我何顏看父老、凱歌今日幾人還、

二、東京凱旋軍歡迎會勸誘狀

拜啓、日露戦役に關し吾軍人の偉功を奏せしことは申す迄も無之、從て其の凱旋を歡迎するに付可成盛大に致度は御同感の義と存候。然して海軍は已に各方面に於て夫歡迎會等舉行致され候處、陸軍は此際一致共同して行ふ事を最も便宜と心付き候爲め凱旋軍の歡迎を目的とする一の團體を組織致候間、御賛成の上御加入被下度此段得貴意候。

敬具。

明治三十八年十二月六日

東京凱旋軍歡迎會理事總代

理事 東京市長 尾崎 行雄

同 男爵 澁 澤 榮 一
同 男爵 千 家 尊 福

本會入會者は無慮千四百餘人に上り、寄附の金額亦二十九萬四千二百圓餘に達した。而して明治三十八年十二月十七日上野公園、明治三十九年二月十六日及同年五月五日比谷公園に於て盛大なる歓迎會が行はれ又第一師管内在職並在籍の軍人軍屬には凱旋記念の銀製記章を贈與せられた。

三、クロバトキン大將の懺悔

わが全露の國民は、戦前に於て開戦には不満であつたが、戦争中も同様に不満であつた。幾多の將校下士兵卒が、戦線に立つて居ても、國民は、後援するどころか至極冷淡であつた。それでも、平民中には多少従軍を志願したものもあるが、貴族、商人、學者なぞ上流の子弟の輩は、極力これを避けてゐた。わが數萬の學生中、醫學生を除

いては、従軍を志願したもの僅か數名に過ぎない。そこへ持つて來て、革命黨は、軍隊の威信を傷つけようとして盛んに宣傳をなし煽動をした。従つて列車に投じ數日の行程を経て、滿洲の野に到着した兵士達の中には、こゝは何れの國の領土で、して又自分達は、何の目的の爲めに、いづれの國と戦つてゐるのか、それさへ知らぬものが多かつた。國民は國民で、九千露里の異境で戦ひ續けてゐる同胞を投りばなしにして少しも顧みなかつた。これで日本に勝てる道理はない。云々（クロバトキン回想錄抜萃）

四、露軍従軍記者英人フランシス、マクカラア氏曰く

成功は人を倦怠に誘ふものである。智識は人に幻妄を齎らすものである。時の流れに伴れて、富の嵩むに随つて、工業上の服役にも商業上の道德にも、凡ゆる物質的享樂の發展に随つて日本人固有の熱心と勇氣と立派なる大和魂とは漸次に其の銳端を缺かれ、挫かれんとするのでは無からうか。嗚呼。明治時代が日本最後の花々しく雄々

しき時代でなければ幸である。

附 一、日露戦争陸軍参加兵力（後方部隊共）

日本軍 約 百八萬人
露軍 約百二十萬人

二、同 陸軍死傷者及俘虜

日本軍 約 二十萬人（死傷）
露軍 約二十二萬人（死傷約十四萬人、俘虜約八萬人）

三、同 戦費

日本 約二十億圓
露國 約二十三億五千萬圓

日露戦争の思出 終

フランク・シモンズ氏曰く

滿蒙は、日本唯一の出口である。滿蒙を塞がば、日本は蓋し窒息するあるのみである。



終

